

# 抗がん作用 2物質発見

県立保健大グループ ボタニイボタケから



抗がん作用のある物質が見つかった  
ボタニイボタケ（県立保健大提供）



乗鞍敏夫助教



松江 一教授

県立保健大健康科学部栄養学科の乗鞍敏夫助教を代表者とする研

究グループは28日までに、県内をはじめ全国に広く自生するキノコ「ボタニイボタケ」から抗がん作用のある二つの物質を見つけ、特許を出願した。乗鞍助教は「最終的には抗がん剤として活用できれば」と話している。同グループは今回、ボタニイボタケのアルコール抽出物から「レ

フアンチンO」「バリアニンA」という物質を発見。2物質は肝がん細胞と大腸がん細胞の増殖を抑える働きがある。現時点では直接、ボタニイボタケを食べて抗がんの効果があるかどうかは不明だ。

「ボタニイボタケ」から抗がん作用のある二つの物質を見つけ、特許を出願した。乗鞍助教は「最終的には抗がん剤として活用できれば」と話している。

同大栄養学科の松江一教授、県産業技術センター（黒石市）の山口信哉研究管理員らが共同研究者として名を連ねる。3年ほど前から、イカスミやサメの胆汁、リンゴのペクチンなどの食資源約40種類について研究を重ねた結果、ボタニイボタケから2物質を見つけ、今年8月に特許を出願した。今後同グループは、

資金面で協力できる企業を探しながら、動物実験を重ね、薬など実用化の可能性を探っていく。松江教授は「県内に自生し食用に適した他のキノコにも、同様の物質が含まれていないか調査を進めた」と話した。

ボタニイボタケは直径5〜10センチで扇形のかさを四方に開き、ボタンの花のような形状が特徴。アカマツの根元に自生し、県内でも広く分布。中国では食用として利用している。